

木立と毛利のお殿様

武 田 剛

(会員・佐伯市木立)

私が小学生のころ、新宅の山崎市五郎爺さんは、毛利の殿様の昔ばなしをよく聞かせてくれました。

その話を思い出しますと、毛利公と木立はいろいろなゆかりが多かった様で、それが地名やお墓などに残っており、仲々面白いので、おもいつくまゝに書いてみました。

毛利の殿様のころの木立は、まだ野原が広く、イノシシや、シカや、キツネが沢山いたので、殿様は多くの家臣を引きつけて、たびたび狩にやって来たそうです。

イノシシは今でも稲や筍を食い荒して大きな被害を出すくらいですから、昔はずい分あばれて村人を困らせていたに違いありません。多分殿様は、作物の害獣駆除と家臣団の志気高揚の実戦訓練を兼ねて狩をやったのでしよう。

そのころは、番匠川にも茶屋ヶ鼻にも橋が架かっていなかったもので、時の殿様、高政公御一行は、船頭町の浜丁を幾艘もの屋形舟で出発し、番匠川を下って、茶屋ヶ鼻から、秋の朝の潮の満ちた木立川をのぼり、木立の角道に舟をつけて上陸したそうです。そして用意した馬に打ちまたがって狩に出発したそうです。

出発して、すぐ狩を始めたらしく、現在の角道区の隣の岡山区に「狩所(カリドコ)」と云う地名が残っています。まあ云うなれば、「毛利藩御狩所」でしょうか。

又地名だけでなく、現在そこに住んでいる成迫仙太郎さんのうちも、「カリドコ」と呼ばれ、成迫さんは今でも「カリドコの仙兄」と云う愛称でみんなから呼ばれています。

このカリドコの窪は大変イノシシの多かった所で、殿

はこゝで大イノシシを仕止めたと言います。

このカリドコの山の鼻をまわると、現在の西の平区ですが、ここにも「狐窪（キツネクボ）」と云う地名が残っています。こゝは現在の西の平の区長・古田正雄さんの家の一帯で、古田さんのうちも「キツネクボ」と呼ばれ、今でも古田さんは「キツネクボのマー兄」と云う愛称でみんなから親しまれています。このあたりは随分狐が多かったらしく、殿様一行は、ひとしきりキツネ狩りを愉しんだあと、今度は中野河内の方へ渡って行きます。

御存知の様に、盆地のような木立ですが、その中は椋敷谷・中野河内谷・大野谷という三つの谷にわかれていて、その三つの谷に二十程の区があります。角道区や西の平区、カリドコやキツネクボは椋敷谷、木立小学校や我が家のある所は中野河内谷です。

その中野河内のかゝりに小さな神様のホコラがありました。市五郎爺さんの話では、この神様は大変性が強くその前を馬に乗ったまゝで通ろうものなら、ときめんに神罰にあてられる程のひどい神様だったそうです。高政公もそれをちゃんと知っていたのでしようが、何しろ天下の秀吉から可愛がられて、ちょっと偉くなっていたも

のですから、つい馬上からの「会釈」で済まそうとしたそうです。ところが、いきなり馬が立ち上がって暴れ出し、殿様はどうとばかり落馬してしまいました。それで落馬した所が「殿のどう」、それがなまって「トロンドウ」と云う地名で今も残っています。そして今はそれがもっと略されて「トロン」と呼ばれています。

その「トロン」は私の家のすぐ近くで、私の隣家の木許繁喜さんと、吉田秀男さんの田んぼの一帯です。そこには、今はイチゴハウスが並び、木許さんと巻矢さんが美事なイチゴを生産しています。

このトロンのイチゴは、木立イチゴの中でも、もっともうまいイチゴです。

それから殿様は落馬したただけではありません。そのはずみに、桑の木の古株で目のあたりをしたゝかに打って見る間に赤くはれあがったそうです。それで、そこが又「目はれ」と云う地名になり、現在は「目はれ」ではかっこう悪いので「目筈（メハズ）」になっています。どうも何やら目筈は、「メハレ」と毛利の矢筈をくつつけたような気がします。このユニークな区は、佐伯市大字木立・目筈区で、木立のほゞ中央、元の木立村役場のあ

った伝統ある区です。

それにしても、さすが猛将高政公だけあって、目はれにも屈せず、予定通り中野河内の一番奥の迫区の広い野で、家臣一同の弓の競射大会を開きました。そこが「の場（マトウバ）」と云う地名で残っており、現在迫区の区長の、野々下ミドリさんの家のまわり一帯です。この区長さんもみんなから「マトウバのミドリさん」と呼ばれています。

この弓の競射は、京都の何かの行事に今も残る「ヤブサメ」のように、馬上から弓を射たそうで、仲々勇壮だったそうです。この時に乗った馬が木立の馬だったかどうかは、はっきりしませんが、そのころの木立は、たいのいの家が馬を飼っていて、日ごろ農耕に使いながら、いざ合戦という時には、馬と一緒に従軍したそうです。多分、米やミノなど兵糧の輸送をしたのでしょうか。

市五郎爺さんの話によると、

「高政公が秀吉について朝鮮に出兵した時、お前のうちの先祖の太郎・治郎・長左衛門という三人兄弟が、馬に陣太鼓を乗せて従軍した」

そうです。

この三人の墓は、城山を望む小高い竹やぶの墓地に、三つ並んで立っています。それは、養賢寺の毛利さんの墓にくらべたら、だいぶ小さいけれども、形はダンゴを重ねたような毛利公と同じ五輪の墓で、その隣には、朝鮮から連れて来た陶工の墓と云われる、いっふう変わった墓も残っています。

三人兄弟のうち、太郎は武田をつぎ、治郎は一家を起して阿部家を名乗り、現在の当主は、東京在住の太三機工の阿部克己氏で、長左衛門も中川家を起し、現在の当主は、前南乳舎組合長の中川久義氏で、中川家の家号は今でも長左衛門と呼ばれています。

陣太鼓は、今もわが家の床の間に座っていますが、もう皮がすっかり無くなって、黒い胴に金色の矢筈の紋がにぶく光っています。

この太鼓を眺めるたび、先祖が朝鮮の人達に迷惑をかけたのを相済まなく思います。

太鼓を見たり、五輪の墓掃除をしたりすると、毛利の殿様と木立のかかわり合いを想像しますが、それにしても、殿様が落馬したのをやゆるような「トロンドウ」とか「メハレ」と云う名をつけるのは、まことに不屈至

極な話です。これは年貢が高かったウラムか、はたまた村人が殿様に従軍し、共に苦労した親しみの故か知る由もありませんが、どうもその語呂に猛将の落馬をひやかすような、あたゝかいユーモアが感じられるので、主従の親しみでつけたのかなと思います。



短歌 ①

研修旅行「蒲江町」に参加して

はまゆうの見学

宮崎 ちづ

(会員・佐伯市中村北町)

波白き江武戸公園雨の中清らに咲けるはまゆうの花

出迎えの富沢会長にこやかに
はまゆう見学のわれらをね
ぎろう

隧道が通りて僻地の浦々も生活の形態変わりしという

山けずり沼を埋めては
拡がりし見下ろす町の息吹は海か
ら

手入れする高校生の分担のはまゆうの花遅しく育つ

社会課の課長の名前を「まーまー」と呼びびているなり富沢会長